

427 肥大心筋は、心筋虚血領域を過大評価しうるか?・・・心筋シンチグラムによる検討・・・

吉丸清道, 西村恒彦, 植原敏勇, 浜田星紀, 下永田剛, 汲田伸一郎 (国循セン放診部)
野々木宏, 土師一夫 (同心心)

高血圧心疾患では冠状動脈病変が伴わないにもかかわらず負荷心筋シンチグラム(SRI)上、しばしば心筋虚血を示す症例を認める。心筋虚血領域を判定するうえで肥大心筋が虚血領域を過大評価しうるか否は重要である。左前下行枝一枝病変(90%以上)の狭心症患者67例を対象とした。心エコー図検査、心電図検査で心筋肥大の有無で2群に分類しSRIでのDEPECT SCORE(DS)等で比較した。

結果: SRI所見, DS, double product, 側副血行路有無等に有意差を認めなかった。肥大心はSRI(PLANAR)による評価では有意な影響を及ぼさなかった。

428 糖尿病患者(DM)の負荷心筋シンチにおいて広範囲にwashout rate(WR)の低下する症例の検討

石黒淳司 津田隆志 和泉 徹 柴田 昭 (新潟大学第一内科) 木村元政 (同 放射線科)

DMで運動負荷(Ex)あるいはdipyridamole負荷(DP)T120心筋シンチを施行した48例中、広範囲にWRの低下を示した15症例について検討した。SPECT像より虚血の有無を判定し、WRは4時間後像より求め、40%未満を低下とした。さらにDMの血糖コントロール状態等を検討した。WR広範囲低下例のうち虚血は10例で認め、冠動脈造影を施行した5例、全て3枝病変を認めた。他は、DPであった。虚血を認めない5例の内2例は、Exの負荷量が不足し、他はDPであった。DPの8例とも血糖のコントロールが、不良であった。DMでWRの広範囲に低下する原因として3枝病変、運動負荷量の不足の他に、血糖コントロールの不良の関与が考えられた。

429 川崎病の心筋シンチグラフィの異常所見

渡部誠一, 石原啓志, 清水純一 (土浦協同病院小児科), 保崎純郎 (東京医科歯科大学小児科), 廣江道昭 (東京医科歯科大学第二内科)

川崎病既往児30名を対象として、ジピリダモール負荷²⁰¹Tl心筋シンチグラフィを行ない、異常所見の解析を試みた。冠動脈造影にてセグメント狭窄あるいは75%以上の局所性狭窄を有する8名(S群)と75%未満の局所性狭窄・冠動脈瘤あるいは正常冠動脈の22名(N群)に分類した。陽性所見として①一時的欠損②恒久的欠損③逆再分布④diffuse slow washoutがみられ、冠動脈支配領域とも良く一致した。逆再分布は側副血行路の発達した二枝病変で特徴的に見られた。N群でみられた異常所見は、軽度のもが多く、成因として①心基部中隔、②breast attenuation, ③体動があり、判定上留意すべき点と思われた。

430 川崎病既往児におけるTl-201心筋シンチグラフィの検討

松裏裕行、山本真、梅沢哲郎、佐地勉、松尾準雄 (東邦大第一小児科) 河村康明、森下健 (東邦大第一内科)

川崎病既往児37例(検査時平均年齢5.4歳、発症からの経過月数平均40.9ヵ月)に対し61回のTl-201心筋シンチグラフィ(TI)を施行したので報告する。dipyridamole(DP)負荷により異常所見を呈した10例中2例の冠動脈は正常で、心筋障害の存在が考えられた。またDP負荷時に切迫梗塞をおこした1例はjeopardized collateralsの症例であった。心筋梗塞合併例8例計21例のうち、経時的に観察し得た4例中2例は虚血所見の改善を認め側副血行の発達を反映していたが、このような症例に負荷をかけない場合正常所見を呈することがあり判定には注意が必要である。慎重に適応を決定する必要はあるが、川崎病の経過観察には負荷TIが極めて重要であると考えられた。

431 Tl-201心筋シンチグラフィによる原発性甲状腺機能亢進症における心筋障害の検討

飯田美保子, 河村康明, 新井久代, 山崎純一, 森下健, 入江実 (東邦大学第一内科) 井上和子 (東邦大学医療短期大学)

原発性甲状腺機能亢進症における心筋障害についてTl-201心筋シンチグラフィを施行し検討した。対象は未治療原発性甲状腺機能亢進症で、Tl-201心筋シンチグラフィ所見は再分布36.4%、固定性欠損18.2%、左室心筋肥大27.2%と高率にTl-201摂取異常を認めた。また同時に施行したTc-99m心プールシンチグラフィでは左右心室駆出率は正常に保たれており、心機能の正常な状態においても心筋における変化が進行していると考えられ、甲状腺ホルモンによる直接・間接の心筋への作用が示唆された。同時に原発性甲状腺機能低下症における心筋シンチグラフィを比較検討し、興味ある知見を得た。

432 全身性進行性硬化症(PSS)における心筋線維化と冠循環予備能との関係-dipyridamole Tl-201 SPECTによる検討

谷 明博, 石田良雄, 松原 昇, 両角隆一, 堀 正二, 北畠 顕, 鎌田武信 (大阪大学第一内科), 滝尻珍重 (大阪大学皮膚科), 木村和文 (大阪大学バイオ研), 山上英利, 小塚隆弘 (大阪大学放射線科)

PSSの心筋線維化が、冠循環予備能の低下に基づくかを評価すべく、dipyridamole ²⁰¹Tl imaging(DTI)でfixed defect(FD)が観察されたPSS(びまん性硬化)の17例において、他領域でのDTI時の²⁰¹Tl washout rate(WR)を観察した。心基部、中央部、心尖部の3短軸像のsegment analysisから局所WRを算出した。健常例7例の結果と比較した時、PSS17例のうち8例はWRの低下を伴ったが、9例は正常WRを示した。以上より、PSSでの線維化は必ずしも冠循環予備能低下を伴わないことが示唆された。